第24回岐阜外科集談会

1) 抗生物質の感受性検査について（第2報）

羽島病院外科
河村　雄一・浅井　紀雄
伴　敏英・原　節雄

昭和37年1年間の膿汁，穿刺液，尿沈渣，虫垂内容等138例の感受性検査の結果をまとめたので報告する．

1種抵抗性は全体で8.3%，葡萄状球菌13%，2種抵抗性は全体で17.6%，葡萄状球菌30.4%；3種抵抗性は全体で27.8%，葡萄状球菌30.4%，4種抵抗性は全体で15.7%，葡萄状球菌17.4%，5種抵抗性は全体で16.7%，葡萄状球菌10.9%，6種抵抗性は全体で9.3%，葡萄状球菌0で，完全抵抗性は0であつた．

皮膚炎症性疾患ではKM, SM, EM, LM, CPが，虫垂内容ではSM, Sin, CPが，葡萄状球菌全体ではKM, SM, CP, EM, LMが感受性が高い事を知つた．

2) 前頭洞 mucocele による眼球突出の1例

岐阜医大第2外科
鈴木　晴雄・林　健太郎

症例　29才の男子，約1年前から右眼瞼下垂と右上眼瞼内側の腫脹を来たし，時々軽い頭痛と複視を訴える．入院検査では右眼瞼下垂，右視力低下，眼球運動障害，及びレ線像で右前頭洞が左のそれに比べ大きく，外側縁に破壊像を認めた．右眼窩内腫瘍を疑い，右前頭開頭の下に入るに，頭蓋内には著変なく，眼窩壁を融解し眼窩内に膨出して眼球を圧迫しある前頭洞 mucocele を見い出し，これを清掃根治せしめた．本症は耳鼻科，眼科領域で取り扱われる疾患であるが，屢々診断が困難な為に本症例の如く，頭蓋，或は頭蓋内疾患と誤診されるが，手術にいたつては，本症は稀に感染して pyocele になつている為，眼窩内腫瘍に推奨される経頭蓋内方法では頭蓋内感染の危険があるため，術前に眼窩内腫瘍の性格を充分見極める必要を痛感した．

3) 甲状腺癌の症例

岐阜医大第1外科
今尾　恒裕

過去10年間にわれわれ外科の外来及び入院にて甲状腺癌の診断を受けたものが8例あり，そのうち3例の若年者について述べた．

子供の甲状腺癌と大人の甲状腺癌とは何か違つた所があるのか，又甲状腺癌に於てはしばしば組織的所見と臨床症状が一致しないことについて二，三の文献的考察を行なつた．

4) 縦隔奇形腫の一例

岐阜医大第一外科
森　正英

従来，縦隔腫瘍は，比較的にまれな疾患であるとされていたが，近年発見の機会が増して来ると共に，手術症例も激増し，決して珍らしいものとは云えなくなつて来た．就中奇形腫は最も多発するものの様であるが，最近術前の各種検査，術後の組織所見等に就いて，典型的な奇形腫の像を示した，17才女子の症例を経験したので，これに統計的な考察を加え報告した．

5) 最近経験した先天性肥厚性幽門狭窄症の2例について

羽島病院外科
河村　雄一・浅井　紀雄
伴　敏英・原　節雄

1) 本年1月1日生れの女児，生下時体重3300g，生後1ヵ月頃よりコーヒー残渣様物を混じた頻回の嘔吐あり，レ線検査後，非観血的治療を試みたが，体重減少，嘔吐頻発，2月17日，右上腹部に腫瘤触知，翌日 Ramstedt 氏手術施行，術後経過良好，術後11日目に退院．

2) 本年2月6日生れの男児，生下時体重3375g，生後殆んど毎日嘔吐あり，来院時（3月10日）危篤状態で，保育器に収容，状態改善後，レ線検査，非観血的療法を試みたが体重減少，嘔吐頻発，3月24日腫瘤触知，翌日 Ramstedt 氏手術，術後経過良好22日目に退院．

以上2例につき反省を試みた.

6)　胃細網肉腫の1例

岐阜医大第1外科
神本敏治

22才，男.

来院1ヵ月前より，特に誘因と思われるものなく心窩部に鈍痛を来たした.

臨床的，レントゲン学的に胃癌の診断で開腹し，胃全剔，脾剔出，膵尾部切除，食道空腸吻合術を施行した．剔出標本では肉眼的に胃大彎側及び胃体部後壁で内腔に突出する腫瘤を形成し，組織学的に細網肉腫であつた.

なお術後12日目より，トヨマイシン，マーフイリン，コバルトボルフイリンを使用したが，術後66病日全身衰弱で死亡した．剖検所見では左側腹部に超成人頭大の腫瘤を形成し，その他大動脈周囲，食道，空腸，下行結腸，気管周囲に転移巣を認めるも，骨髄には異常認めなかつた.

7)　胆嚢癌の一例

岐阜市民病院外科
米谷　滌・安江　幸洋

胆嚢症は珍らしいものではないが，Papillary Adenocarcinoma は比較的報告例が少ない．我々は71才の男子の胆嚢粘膜全般に亘つて著明な乳頭様増殖を示し，之が悪性化したと考えられる1例を経験したので報告した．尚結石5個を合併していたので，結石と癌発生との関係について考察を試みた.

8)　結腸憩室症の1手術例

岐阜医大第2外科
斎藤　晃

症例は71才の男子．入院の2日前から左側腹部に疝痛様疼痛を来たし，嘔吐を伴なう．イレウスの診断の下に開腹した所，S字状結腸及び下行結腸に多発性憩室が存在し，その内部にそれぞれ糞石を有していた．イレウス症状は憩室症に基づく Darmdyskinesie と診断し，結腸左半切除を行なつて全治せしめ得た.

かかる結腸憩室症の本邦に於ける報告は，極めて少数であるが，欧米に於ては40才以上のものの約5％に発見されるといわれており，この差は些か奇異に感じられる．本症は合併症なき限り多くは無症状であると言われるが，本症例の如き腹痛，便秘或は下痢を来すものもあると言う．本症例の憩室壁の組織所見をみると，癌性変化も充分あり得る事の様に思われるので，姑息的手段によらず思い切つた腸切除を行なつてよいと考える.

9)　後腹膜 Teratocarcinoma の1例

岐阜医大第2外科
斎藤　晃・星野　睦夫

我々は最近，診断困難な後腹膜 Teratocarcinoma の1例を経験したので報告した.

35才男子で腹部腫瘤を主訴として来院，左腎腫瘍の疑のもとに手術するに，横行結腸間膜根に小児頭大の腫瘤あり，横行結腸の一部と共に全剔出した．組織学的に単純癌，もしくは細腺管癌で，胃癌の転移と考えるのが最も妥当と思われた．再開腹し胃切除を施行，組織学的には胃癌の所見なし．そこでもう一度本腫瘍を組織学的にくわしくしらべると，骨組織，骨様組織が認められた．この事より後腹膜に奇形腫の如き，良性腫瘍が発生し，その上皮成分が癌化したと考えるのが妥当だと思われた.

術後4ヵ月目の現在，元気に生存中である.

10)　巨大水腎症の1例

岐阜医大泌尿器科
三浦佳久

水腎症は泌尿器科医にとつてはしばしば遭遇する疾患であるが，内容1 l 以上の所謂巨大水腎症は比較的稀な疾患とされている.

最近我々は内容 1.85 l，大きさ 25×17×9.5，重さ 1975g の巨大水腎症を経験したので報告した．又水腎症の診断をレ線腎盂撮影，後腹膜気体撮影，経皮的直接腎盂撮影法等でそれ程診断は困難ではないが，本症例では約10年前より無症候性に発生した，組織学的にも結石の嵌頓による水腎症であり，内科的には脾腫，膵嚢腫と誤診された症例である.

加えて若干文献的考察を試みた.

11)　陰茎癌の1例

県立岐阜病院泌尿器科
石山　勝蔵・足立　一郎

85才農夫．畑仕事中，陰部より大出血を起して倒れたので，家人に発見されて来院した.

3ヵ月前，山へ行つた時，木の杖が折れて陰茎に当り，この部に傷が出来たのが始りという．生来強い

包茎であり，性病の既往歴はなく，血清ワ氏反応陰性.

亀頭は略々健全であるが，外尿道口を含めて，陰茎下面は全般に大きな腫瘤を形成し，脆弱乳嘴状，一部噴火口状潰瘍となり，左鼠径リンパ節は拇指頭大に2個腫大している.

局麻の下に陰茎切断術及び両鼠径リンパ節の清掃を行なつた．術後経過順調，病理組織検査ではカンクロイドでリンパ節の1個に転移を認めた.